総合科学部助教授
饗場 和彦

人々は戦争で殺され続けていくのか

古くて新しい課題に取り組む

最先端の研究というと、イメージとしては科学的な分野を想像してしまいますが、21世紀に入ってからはむしろ価値観や考え方において新しさが求められている気がします。今回はイラク戦争が一応の終結を見た時期のタイムリーな取材となりました。本誌の発刊までに情勢が変わるかもしれませんが、戦後のイラクの復興とアメリカの行動をめぐり、たくさんの課題が山積みされています。饗場先生の研究室では国際政治学を研究し、特に安全保障制度、民族紛争、人道的介入、平和構築、国際協力といった、今の国際社会が直面している様々な問題に取り組んでいます。一言で言えば、大昔から苦悩してきて、そして将来にわたっても解決は難しい「戦争と平和」という課題です。

戦争自体は古いテーマですが、戦争をめぐる国際社会の状況には今、多くの新しい変化があるそうです。

一つ目は、「新しい帝国」としてのアメリカの出現です。9・11テロ後、アフガン戦争、イラク戦争を経て、アメリカは実質的に国際社会を支配しつつあります。それにより世界は平和になるのか、紛争が多発するのか、という問題です。9・11テロの際、偶然、ニューヨークにいてその衝撃を体験した饗場先生は、昨年はアフガンの現地調査も行い、この最も新しいテーマに意欲を注いでいます。

また、昔の戦争は、国と国で行うものが多かったのですが、最近は民族間で殺し合う紛争が多発しています。「日本では民族紛争といってもピンときませんが、いろいろな条件が重なれば、実は東京と大阪の間で民族紛争が起きても不思議ではないんです」。言われてみれば、徳島も大阪圏ですが、東京とは違う点がかなりあります。たとえばエスカレーターに乗るとき、左右どちら側を空けるかなど。饗場先生は、80万人が殺されたルワンダのケースをはじめ、多くの民族紛争を現場にも行きながら調べています。

多角的に見るということ

先生は新聞記者の経験もあるため、物事を多角的に見るということと、問題の背景や実感をつかむため現場に行くということを、学生にも説いています。

「地雷を廃絶しようという活動がありますが、地雷は"良い"兵器なんです」。取材中、ちょっと驚くような言葉が饗場先生から出ました。

「銃やミサイルなどは相手に攻め入って殺傷するものです。しかし地雷は相手から攻め込まれたとき作動するという受身の性質です。攻撃的ではなく防御的という点で"良い"わけですが、実際は埋めっぱなしになり、戦争が終わっても多くの市民を傷つけ続けるので、もちろんなくすにこしたことはありません。ただ、感情に任せて地雷反対を言うのではなく、"良い"面までふまえた、多面的で冷静な判断でもって地雷反対を考えてほしいということです」。

こうした研究のほか、自ら平和構築の活動にも携わっています。紛争後には選挙が行われますが、それを手伝う国際的な選挙支援活動として、ボスニア、コソボ、カンボジア、東ティモールなどで計10回、政府やNGOの要員として参加しています。

今後の課題としては、国連を中心にした安全保障のシステムをいかに再構築していくか、そうした国際社会における公共的な軍事力の行使にいかに日本が関われるか、だそうです。

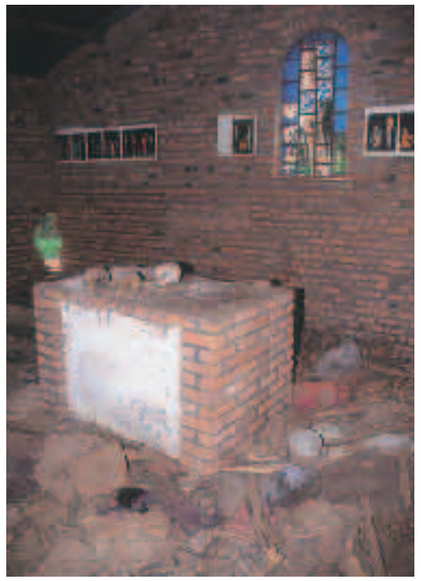
「憲法9条は正しいことを書いているので変えずに、その方向で努力を進める一方、世界の現状では公共的な軍事力が必要とされる場合があり、そのときは日本も軍事的な協力を行うべきなのです。理想と現実の両方をふまえた発想が大事です」。

研究室には、アフガンの子供たちの写真と、ボスニア紛争で使われた薬きょうなどが飾ってありました。なるほど、理想と現実を多面的に見ろという、先生らしい飾り棚でした。

研究室での国際政治学ゼミの様子（2003年5月撮影）

饗場 和彦（あいば かずひこ）
総合科学部助教授

1986 早稲田大学法学部卒業
読売新聞社に記者として入社、92年退社
95 英・ブラッドフォード大学大学院平和学修士課程修了
99 大阪大学大学院国際公共政策研究科博士後期課程単位取得退学
2000 徳島大学総合科学部講師
01 同助教授



94年に起きたルワンダのジェノサイド（大量虐殺）では、教会などがその現場となった。内部には被害者の骨や持ち物が散乱していた[99年12月撮影]

コソボで行われた選挙の開票所を警護する装甲車と、その選挙の支援活動を行っていた饗場教官[2000年11月撮影]